
獅子の午睡

宮森すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獅子の午睡

【Nコード】

N1214M

【作者名】

宮森すず

【あらすじ】

短編。自分を猫だと思ったかった獅子とその飼い主の話。

三日三晩生死の境をさまよった後、戻ってきた世界には光も音もなかった。頭の芯まで痺れるような静寂と暗闇に包まれて、それでもほっと安堵したのを覚えている。

まだ、生きていた。

触覚が残っているから、あの人に触れられる。

嗅覚が残っているから、肌の匂いがわかる。

味覚が残っているから、食事を共にすることもできるだろう。あの人は味もわからぬ無粋者と同じテーブルを囲むことは好まない。指で己の舌に触れ皮膚の味を確かめながら、わたしは残った感覚をひとつひとつ拾い集めては検分した。

爪も牙も失って、まるで自分が無力な仔猫にでもなったような気分だったけれど、不思議と悪い気はしなかった。身体の不自由はしよせん、たんなる不自由でしかない。慣れてしまえばその不自由さがあたりまえになる。ひとりでは食事も排泄もままならぬ生も、元来ヒトとしての矜持や人間性に乏しい者には絶望するほどの不幸ではなかった。

そんな己の状況よりも、わたしが気にかけていたのは主人のことだ。目覚めた場所に主人の気配はなく、探しにゆこうにもわたしの身体は自由がきかなかった。体内に差し込まれた何本もの冷たい管がわたしを寝台に縛りつけていた。それらを引き抜いて起き上がろうとすると、どこからともなく手が伸びてきて押さえつけられた。驚いて噛み付いたら全身を拘束され、次の日からちがう場所に移された。

わたしに与えられたのは奇妙なこしらえの寝台だった。四方を木製の柵のようなもので囲われていて、天蓋のようにごく薄い布が垂れ下がっている。はじめは赤子の扱いだと思ったが、実のところそ

れは檻であるらしかった。格子の木目を指先でなぞると表面の凹凸で何頭もの獅子の存在に気づく。鬣をふりたてたもの、荒々しく牙を剥いたもの、獲物を狙うがごとく低く伏せたもの、横たわり尻尾の先だけもちあげたもの。精緻なレリーフからはまだ新しい木とニスの匂いがした。

わたしはおとなしく柵の内側で主人を待ちつづけた。その間、何人も人間が入れかわりたちかわり部屋にやってきてはわたしに触れた。話し声はもとより聴こえない。わずかな時間わたしは寝台の外へ連れ出される。

離れたくはなかった。外には主人につながるものはなにもない。ただの人間がいるだけだ。

枯れ木のように乾いた皮膚、ゆがんだ爪、骨ばって張り出た関節。何週間も忘れ去られてしなびた果物のような手のひらがわたしの表皮を撫でるたび、わたしは主人の薄白くみずみずしい手を思い出した。形よく整えられたオーバルの爪は香油で磨かれいつもよいにおいがした。嗅覚の記憶が呼び起こされるにつれ、「ル・リオン」と呼ぶ声を思い出す。わたしは現実から乖離する。感覚を遮断して記憶の声に耳をかたむける。

「獅子のくせに植物のように欲がない」

主人はわたしをそんな風に評した。

玲瓏とした音色は魂に刻まれたかのようににはっきりと覚えているのに、そのとき主人がどんな表情をしていたのかがどうしても思い出せない。わたしは諦めてさらに時間を巻き戻すことにした。

昔々、わたしは孤独だったらしい。それが孤独なのだ、と気づいたのはずっと後になってからだったけれど。「シンカーノワール」という名の孤独は生まれてからずっとわたしのものだった。五感を超えた第六感、類稀なる才、正オルガニストの適正、呼び名はいくとおりもあったけれど、どれもこれも本質とはかけ離れていた。言葉にしようとするほど遠のく、わたしのソウルヴァリアント

はそういう類のものらしい。

ただ、わたしの両親が重荷にしか感じていなかったわたしの孤独に価値を見出す人間がいたという話だ。新しい「家」は今まではまったくなかった世界であって、その世界の中心の玉座に座っていたのは幼いふたりの姉妹だった。

初めて双子を見たときのことを、わたしは生涯忘れないだろう。

それはとても美しい一対の生き物だった。妹は野苺の赤を織り交ぜた金の髪と思慮深い若草の瞳をもっていた。その面差しは才氣にあふれ、大人びていて、一目でわたしは彼女を気に入った。

そして妹の影から、そっとこちらを伺うもうひとりの娘。燃えるように赤い髪が華奢な首筋から肩を覆っていた。その色はわたしに彼女の薄い皮膚の下を流れる温かな血を想像させた。月と星と地上の光をすべて集めたような娘、ルナシヤスという名前がとてもよく似合っていた。

双子はひとつの魂をふたつに分かたれたことが理解できない、というふうにぴったりと互いによりそっていた。美しく正しいシンメトリーを奏でる様を、わたしは深い満足とともに飽かず眺めた。互いが互いの足りないものを補い合う完全なソウルヴァリアント、ふたり以外のもの全てが絶対的な異物であるという認識。潔いまでの隔離。他人の孤独を知って、はじめてわたしは自分がひとりきりであることに気づいた。

「あなた、だあれ」

名乗らないわたしに向けられる視線。無礼をとがめる声には幼いながら悪意のない傲慢さが見え隠れした。

「サウンドでもヴィジョンでもない」

妹が補填した。見た目どおり聡明な娘だ。

二対の視線がくまなくわたしの全身をさぐる。ふたりのかすかな温度差がくすぐったかった。

「そう、あなたが、そうなのね」

双子の間でなんらかの結論に達したらしい。姉のルナシヤスが一

歩前に出て手をさしだした。わたしは薄白くなめらかな手の甲をし
ばらく鑑賞した。我慢強く伸ばされた手に本能のままに頬をよせ、
鼻先をくすぐるほのかな香りに誘われると舌をのばして指先を舐め
た。

「まるで犬か猫みたい」

ルナシヤスの言葉に、妹がそつと首を横に振った。「本物のシン
カーノワールなら、仔猫にだってライオン並の爪と牙が備わってい
る」

「噛みつくの？ それとも引っかく？」

否定のつもりでもう一度爪の先を舐めた。

当時のわたしは握手も知らない子供だったけれど、これが自分の
運命を決定づける出会いであることは疑わなかった。

十年の歳月経た今も、その認識は変わらない。

あの手をとった瞬間から、彼女だけがわたしの主人だ。

寝台から抜け出して地下へ潜った行動の裏に、明確な意志があっ
たわけではない。抵抗と呼ぶには生ぬるく、諦めと呼ぶにはリスク
イな動機の根源は唐突にわたしの内側からわいてきた。

主人に会いたい。

でも、主人はここにはいない。

事実を受け入れれば、わたしがここに留まる意味はない。

主人はわたしを捨てたのだろうか。

わからない。

ただ、淋しかった。

地下都市<ダウン・ヘイヴン>は人が一人増えようが減ろうが誰
も気にもとめない、そんな場所だ。そこで一生、主人の思い出だけ
を胸に、眠っていようと思った。わたしは邪魔するもののない暗闇
と静けさに感謝した。いっそ五感すべてを奪ってくればよいと願
った。鼻先をくすぐる埃の匂いや、肌にあたる毛羽だった布地の感

触がわずらわしい。味覚もいらぬ。主人のいない世界など、わたしには何の意味もない。

ひとひらの花弁よりも軽い、そんな世界の中で退廃の眠りをむさぼるわたしを揺り起こす者がいた。若いサウンドのようだがソウルヴァリアントまではわからなかった。もう何年も、ともにヒトと接していないせいで、わたしの感覚は鈍く錆付いてしまっている。

サウンドはゆっくりとわたしに近づく。手のひらへの筆談で自分は詩人だと名乗った。名前をきかれたので奇妙な娘だと思いながら「わすれた」と応じる。

口がきけると思っていなかったのだろう、驚く気配が伝わってきた。詩人はすぐに面倒な筆談をやめて普通に話しかけてきた。わたしの指は詩人の唇と舌に触れていて、その動きがふたりの会話の出发点だった。

「あなた、ここで何をしてるの」

「今は詩人と話をしている」

「普段は？」

「眠っている」

「ひとりで？」

「ひとりで」

「淋しくない？」

「淋しいよ」

「……………また遊びにきてあげようか」

「……………」

「今、わらったね」

わらっているのは、詩人だ。そう思ったがかわりに口の端をすこしだけでもちあげた。

「ほら、ね」

詩人がうれしそうに言う。「眠ってばかりいないで、僕と外へ行かない？」

わたしは首を横に振った。わたしはどこへ行きたくない。わたし

しはただ、眠っていたい。

「そう。変わってるなあ。ここには面白いものがたくさんあるよ。面白いだけじゃなくて危ないこともね。知ってる？ 隣の店は秘密でアジャスタの改造をやってくれるんだ。もちろん違法だけど」

詩人が声をひそめる。くすくす、笑う。めったに外出しないわたしよりもよほど地下の地理にあかるい。腕の良い技師を知っているのでアジャスタが必要なら紹介しようか、と言うからまた首を横にふった。

「ソウルヴァリアントのせいじゃない」

見えないのも聴こえないのも原因は別にある。証拠にわたしは未だシンカーノワールであり、それ以外の何者でもない。

「それじゃあ、何かほしいものある？ お茶をご馳走になったお礼に、次に来るとき何か持ってこようか」

別れ際。ミントの爽やかな香りがする煙草に火をつけながら、詩人がまた奇妙なことを言った。再訪の意図もくほしいものゝもわからなかったので、

「ならば詩を」と望んだら、

「僕の詩？」

ときた。君、詩人だろう。

「そうだけど。いや、うれしいな」照れたようにつぶやく。おかしなところで謙虚だ。

「次までに推敲しておくよ」

そしてわたしは約束どおり、薄い一杯の茶の返礼に見事に確立された世界の一端をかいま見た。

詩人の吟じる言の葉はわたしの見えぬ目に完全な色彩を、聴こえぬ耳に統率された楽の音をもたらした。長い間わすれていた静かな喜びに包まれて、わたしは長く細く息をはきだした。

「僕の名前は、遠い異国の古い詩人と同じなんだ」

何度目かの来訪の際、とっておきの秘密を明かすように詩人はささやいた。わたしは詩人の名も、異国の古い詩人とやらの存在もし

らない。けれど、詩人に感化されて眠っていた感覚が目覚めてゆくにつれ、ひとつの確信を抱いた。これは、この生き物はわたしの同類だ。

これは本当は、サウンドでもヴィジョンでもない。まだ土の下で眠っている種ではあるが、やがて春がくれば芽吹くだろう。

詩人がここにやって来たのはもはや単なる偶然ではなかった。無意識のうちにわたしという同種の存在を探りあてたのだろう。わたしは唇と舌にあてがっていた指を動かし、目と鼻と額の位置をさぐった。

「髪と瞳の色を教えてくださいませんか」

わたしの質問に小首をかしげながらも応えてくれる。わたしはここにやってきて以来初めて主人以外の人間の姿を想像した。

「なんなのさ、もう」

不必要な接触を厭うてか、詩人がすいと離れる。しかしそうすると会話もなりたたなくなるので、しばらくするとしぶしぶといった気配でもう一度わたしの手を自ら口に含んだ。

「変だよ、今日」

どうやらずいぶんと小綺麗な顔立ちの詩人は、初めて警戒心をみせた。いまだ不快感よりも好奇心が勝っているらしく、立ち去ろうとはしないものの距離をはかりかねている。

「ねえ、僕にはあなたがサウンドなのかヴィジョンなのかもわからない。どこから来たのかも。どうしてここにいるのかも」

「他に居場所がない」

主人がわたしを必要としない限り、この世界のどこにも。

嘆きは深くて暗い。うなだれたわたしを慰めるかのように、詩人がわたしの髪に触れた。

「……どんな人なの？ 好きだった？」

わからない。どうしていなくなったのかもわからない。

「名前は」

ルナシャス。

月と、星と、地上の光を全て集めたような。

美しい名の人。

ふいに詩人の気配が近くなった。わたしと詩人の間でわたしの腕が折りたたまれ、詩人がわたしの肩をつかんだ。

「あなたの大切な人を、僕は知ってる。あなたの名前を、僕は知ってる。あなたは……」

詩人のふるえる舌が、唇が、わたしの名を呼んだ。
ルーヴル、と。

未来のシンカーノワールがわたしを呼び覚ました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1214m/>

獅子の午睡

2010年10月8日14時36分発行